

ヤクザになった近所のお兄ちゃんに裏オークションで落札されて媚薬セックスでとろとろおまんこになるまで中出しされる女の子の話。

朝日 きなこ

「千五百！」

「千五百五十！」

「二千！」

どんどん上がっていく数字は、金額だ。

私が頭のおかしい金持ちに売却される金額。

どうして、こんなことに。私はただ、穏やかに静かに暮らしたいだけなのに。

体を覆う踊り子のような衣装についた煌びやかな装飾。まるで宝石のようだが、スポットライトの光を反射して、眩いていた。

後ろに回した両手には、頑丈な手錠がはめられている。

「二千百！」

「二千二百！」

「三千！」

その声に、オークション会場がどよめく。

「三千万！三千万でよろしいですか！」

目元を仮面で隠した司会者が意気揚々とした声で、会場に呼びかける。

次の声はなかなか上がらない。

どうやら、私は顔も知らない金持ちのおじさんに、三千万で売られるらしい。昨日まではずっと、逃げ出したくて堪らなかったのに、もうここまでくると絶望を通り越して、諦めしか沸いてこない。

もう、いい。もう疲れた…。

目を瞑り、待ち受ける地獄を受け止めようとしたとき、会場に一人の男の

声が響いた。

「五千……」

え……。

桁の違う値段に、会場のあちこちから驚きの声上がる。いきなり跳ね上がった金額に、司会者も動揺を隠せない。

たかが、セックスの相手に五千万。この声の主は、まさに捨てるほどのお金があるらしい。まあ、なんでもいい。いくらで買われようが。誰に買われようが、私の運命は変わらない。

異様な空気が流れる会場に、再び、男の声が響く。

「おい、聞こえなかったのか、五千万だ。もう他にいないなら、さっさと落札しろ」

「は、はい…ご、五千万！もう、いらっしやいませんか？」

司会者の呼びかけに、答えるものはいない。

「決まりだな」

「で、では…こちらの商品は五千万円での落札になります！」

拍手が沸き起こる。それは、絶望へのファンファーレだ。

そんななか、舞台の後ろから黒服たちが、私を迎えに来る。落札が決まった商品は、すぐに裏に行つて落札者のもとへ行く準備をするからだ。

促されるまま、舞台裏に下がろうとした時…

「触るな！」

突然響いた声の主は、落札者の男だった。

私は驚いたまま、後ろを振り返ると、会場の後方から男が舞台に向かって

歩いてきた。

「それはもう俺のものだ。俺の許可なく触るな」

「し、しかし：お支払いはまだですし、それに準備がありますので…」

司会者がおどおどした様子で、男を嗜める。しかし、こちらに向かってくる足音は止むことはない。

いったい、どんな人なんだろう。

流石に気になって目を凝らす、スポットライトの逆光で、男の姿は見えない。なかった。

「金ならここにある。さっさと商品をよこせ」

男の声がどんどん近くなる。

あれ：思ったより、若い声。それに、この声どこかで…。

足音が大きくなるにつれ、私の心がざわざわと波立っていく。

「お、お待ちください、お客様！ちよ、舞台の上はご遠慮ください！」

司会者が止めるが、男はどうとう舞台上がり、私の前にやってきた。

「立て。今からお前は俺のものだ」

「え……」

状況が飲み込めない。ただでさえ、妙な薬を飲まされてから、思考がぼやけているのに。

「ぼんやりするな。さっさと立て」

苛立ちを隠しもせず、男に命令されるが、体に力が入らない。

「ちツ…薬か」

「え……わっ！」

小さく舌打ちをすると、男は私の腕を引いた。そのまま、立ち上がった体が簡単に抱き抱えられる。

「わ、なっ……！」

突然、体が宙に浮いて、私は驚きの声を漏らす。

「なッ………ええ」

でも、それ以上に驚いたのは、私を抱き抱えた張本人の顔だった。

端正な顔つきに、シャープな眼差し。あの頃より、少し年を重ねたが、忘れるはずがない。

「え、う、うそ………零明さん……？」

「やっと見つけた……」

「な、んで…」

その後、半ば連れ去られるように、零明さんに私は会場から連れ出された。状況を飲み込めないまま、零明さんと一緒に高級車の後部座席に座っている。煙草を片手に、苛立ちを隠さない零明さんだが、運転手の男は顔色一つ変えず、ハンドルを握っていた。

「れ、零明さんですよね…?」

「敬語はやめろ」

その声は、紛れもなく鹿島零明のものだった。

彼は昔、近所に住んでいたのつ上の優しいお兄ちゃんだった。里親から疎まれ、いつも一人で遊んでいた私に手を差し伸べてくれたヒーローのような存在。

私が高校生になったとき、突然姿を消してから、何年も会っていないかったのに。まさか、こんなところで会うなんて。

「なんで…こんなところに」

聞きたいことは山ほどあるが、最初に漏れた疑問はこれだった。

「そんなこと決まってるだろ」

吐き出された息とともに、煙草の紫煙が揺れる。うっとりするほど、整った横顔はぞっとするほど怖かった。

無意識に唾を飲み込んだ瞬間、零明さんの手が私の首を掴んだ。

「ぐっ…！」

「お前を手に入れるためだ」

指が喉に食い込み、小刻みに震えていた。

「俺がどれだけ探したと思ってる」

「くツ、れ、いめいさん…ツう…！」

零明さんの顔が鼻先がぶつかりそうなほど、近くなる。

「やっと見つけたと思ったら、裏オークションの商品だと？ふざけんなッ！こんな恰好して、いったいどこの下衆に犯される気だったんだ？」

零明さんの手が、胸元が透けた衣装を掴んだ。

ギリギリと強く引っ張られ、布が裂けそうになった時、零明さんの手が緩み、彼は大きく息を吐いた。

「はあ……」

首元にあつた手も離れていく。

「がはッ、ごほっ……ッ、零明さん……？」

零明さんは私の肩に手を置いたまま、俯いていた。

「会いたかったんだ……」

「え……」

ゆっくりと零明さんが顔を上げた。眉間をひそめ、苦渋に歪んだその顔は今にも泣きだしそうだった。

「れいめっ……！」

今度は強く抱きしめられる。

胸に伝わる温もりに、強張っていた気持ち解れていく。

なんで彼があそこにいたのか。今、彼は何をしているのか。

あんな大金をなぜ持っていたのか。

分からないことばかりだけど、今は全てどうでも良かった。ただこの温もりに、身を委ねてしまおう。そう思い、そっと目を瞑った時、心臓がどくつと異常なほど跳ねた。

え…

ドクンツ…ドクンツ…!

それに合わせて、全身が沸騰したように熱を持ち始めた。

「ふっ…はっ…な、なにこれ…ツ…」

突然体を襲ったその熱に、パニックになる。苦しいほどの鼓動と体の芯が痺れる感覚に、零明さんの体を押し返していた。

「おい、どうした」

「やッ…体、変ッ…た、たすけて、あつい…！」

「落ち着け」

零明さんが私の腕を取り、背中をさすってくれる。その瞬間、どろっとした感覚が下着の中に広がった。

「え…」

とろとろとしたそれは、紛れもなく愛液だった。

焦る私に反して、それはひっきりなしに股を濡らしていく。

「や、なにこれ…からだ、おかしい…！」

「大丈夫だ、落ち着け！」

パニックになる私を零明さんが再び抱きしめる。彼の温もりと匂いを強

く感じると、ますます体の熱が上がっていく。

そんな私の耳元で、零明さんが囁く。

「俺が助けてやる…」

鼓膜にじんわりと響く低音に、腔奥がきゅうと締まるのを感じた。

「んう…ッ！」

皺ひとつないシートの上に落とされる。

両手を広げても、端まで届かないほどのサイズのベッドは、私の体重くら

いではびくともしない。

「零明さん……！」

名前を呼ぶと、ぎらぎらと欲情した瞳と目が合った。

零明さんはネクタイを解くと、床に放り投げる。緩めた襟元から伸びる健康的な首元が、強い雄の気配を覗かせていた。

「零明さん……」

鼓動が速まり、体温がじわじわと上昇する。名前を呼ぶ声は、震えていた。それでも、名前を呼ぶことしかできない。

「零明さッ……んんう！」

呼びかけは、口づけに遮られる。

開いた口から、舌が入り込み、絡み合う。肉厚な舌が奥歯を撫で、上顎を

擦るだけで、びりびりと電流が走るような刺激が首筋を流れた。

「んんう、ツ：んんう♡んんう：うう♡♡」

あまりの気持ちよさに夢中で舌を絡めていると、下腹部がじくじくと疼き始めた。

な、なに：：これ：：。

キスだけで、膣口からひっきりなしに蜜が零れてくる。

「んんううう~~~~ツ!!♡♡♡」

やばい：：これ、キスだけでイっちゃう：：！

絶頂の気配を感じて、思わず零明さんの肩を押し返すが、そんな力では彼の体はびくともしない。

「んんうううツ!♡♡んツ、んんうツ~~~~!♡♡♡」

やばい…だめッ…!

そんな私をさらに煽るように、零明さんが私の舌をきつく吸い上げる。その刺激に、腰がびくんッ♡と跳ねた。

「んうううぐうウ〜〜〜ッッ!♡♡♡」

おまんこに全く触れていないのに、キスだけでイっちゃった…?!

「ふう…はッ…うそ…ッ♡♡」

絶頂の余韻と達したことの衝撃で放心状態の私を、さらなる昂りが襲う。いったはずなのに、体は満足するどころか、もっともつと欲望が沸き上がってくる。

「な、んで…いったのに…治まんない…っ!」

「媚薬のせいだ」

その言葉に、オークシヨンが始まる前に飲まされた錠剤を思い出した。

「あのオークシヨンでよく使われる遅効性のものだ。売られた商品が客のもとに渡ったところに、効果が現れるようになってる」

改めて、自分がいかに危険な所にいたのかを理解した。

「しかも、遅効性の分、効き目は抜群だ。一度や二度イったくらいじゃ、絶対に治まらない。それどころか…イけばイくほど、媚薬の効果が高まっていく」

「ツ…うそ…じゃあ、どうしたら…!」

「簡単なことだ…」

零明さんが私を押し倒し、臍の下をぐっと手で押さえた。

「ここに俺の子種をぶち込めば治まる」

「えっ…」

何言って…。

「意味わからないのか？」

衝撃の台詞に固まってしまった私の耳元に、零明さんが口元を寄せる。

「俺の精液をお前のまんこに流し込むってことだ…」

「ッ…！」

直接的な言葉が羞恥を誘う。

でも、その言葉におまんこの奥からじゅわ♡と愛液が滲みだした。

「だ、だめ…ッ」

今にも陥落しそうな体を堰き止めるために、理性をかき集める。

「だめ？ じゃあ、なんでこんなに濡れてるんだ？」

「ああッ…!!♡♡」

零明さんの手が布越しにおまんこに触れる。軽く押すだけで、そこはぬちゅ♡といやらしい音をたてた。

「だ、だめッ…!!」

「だめってそればかりだな。そんなに嫌なら、理由をくれてやる。いいか、お前は俺が五千万という大金で買った商品だ。お前に俺を拒む権利はない」

鋭い眼差しに、息を呑む。

「お前は俺の、俺だけのものだ…ッ!」

零明さんが薄手の衣装を掴み、そのまま力任せに破り捨てる。胸元が露わになり、すでにぷっくりと勃った胸の突起がふるふると震えていた。

胸を隠そうとした手を掴まれ、そのままシートに押さえつけられる。

「やッ…！」

「恥ずかしさも感じないくらい、気持ちよくしてやるよ…ッ」

そう言って口角を吊り上げる零明さんはぞっとするほどの色気を放っていた。

そんな彼に見惚れていた隙に、乳首を舐められる。

「あっああアア〜ツツ！♡♡♡やだ、ツ、だめええ♡♡ッああ♡やらあ♡」
舌先で先端をちろちろと舐められ、痺れるような快感が全身に流れていく。

「ひぐッ！♡♡♡ああッ♡♡つらめえええ！♡♡だめええ♡♡ちくび、ダメ♡♡なめないでええ♡♡」

てる」

「ツやああ♡だめ、え♡あっああア！♡♡♡やだ、ツ、だめええ♡♡いわな
いッ♡やだああ♡♡」

「このまま、今度は乳首だけでイケ♡」

再び、零明さんが乳首を吸い上げる。さっきよりも強く、ぢゅぢゅ♡と水音が鳴る。

ぢゅ♡ぢゅ♡じゅる♡じゅる♡じゅる♡じゅる♡じゅる♡じゅる♡れろれろ♡れろれろ♡
じゅる♡じゅる♡じゅる♡じゅる♡れろれろ♡れろれろ♡

「ああッ♡、やああ♡っああ♡、いやだアああッ♡♡ツやああああ〜ッ
ッ！♡♡だめ、え♡ッああ♡やらああ♡♡いっぢゃううう〜ッ♡♡いっ
っぢゃうからああ！♡♡」

